天理教と現代社会の生死観：病い

天理大学人間学部教授
おやさと研究所研究員
澤井　義次　*Yoshitsugu Sawai*

私たちの生活の中で経験する病いには、どのような意味が込められているのだろうか。ここでは、まず、現代の医療の視点から、病いの意味を把握したい。そのうえで教義学的な視座から、特に「原典でもって原典を解釈する」という視点に留意しながら、病いの意味を天理教の意味世界に位置づけて考察することにしたい。

一　病いと現代の医療

医学・医療は現在、大きな転換期にさしかかっており、治療よりも予防が重要であると言われる。「病い」(illness) とは、アメリカの精神医学者で医療人類学者でもあるA・クラインマン(『病いの語り』）によれば、「人間に本質的な経験である症状や患うことの経験」である。それは医学的には、身体の生理的な異常、正常の機能が営めなくなることを意味する。病いは東洋医学では、気の流れの異常やアンバランスとしてとらえられるが、近代医学では、メカニズム解明をめざす実験医学を基礎に置いており、現代医療のエートスの基底には、病いの原因を根絶するという発想がみられる。

病いについて、私たちは医学的な診断だけでは納得できない。中川米造（『医療の原点』）も指摘するように、「医療は、病む者と癒す者との間の人間関係の一つの形態である」。医学が追求すべきなのは、単なる生物医学的あるいは統計的な知ではなく、公共知を含む統合した知、すなわち哲学者の中村雄二郎が言う「臨床の知」である。病いを人類学的視点および臨床的視点から見るとき、それはクラインマンによれば、多義的ないし多声的であり、複数の意味を表して（あるいは隠蔽して）いる。このことは、病いについて様々な「説明モデル」が存在することを意味する。

老化や生活習慣病の原因を解明している辻一郎（『病気になりやすい「性格」』）は、心理的なストレスが引き金となって、さまざまな病気が起こると言う。「生きがいや人生観・意欲、そして性格といった一般的な心理要因が、健康と病気そして寿命に大きな影響をおよぼしている」と分析される。人間の生における病いは、現代ドイツの教育学者ボルノウ（『実存哲学と教育学』）によれば、「通常の生のプロセスの攪乱」であり、人間の生を脅かす出来事である。ボルノウによれば、病いという危機は人間の生に必要不可欠に帰属するものであるが、この危機を潜り抜けることによって、人間の生の「新しい始まり」への跳躍になるという。

二　病いの存在とその意味―教義学の視点から―

このように現代医療における病いの意味を把握したうえで、天理教のコスモロジー（人間観・世界観）における病いの意味を考察したい。原典「おふでさき」には、「やまいとゆうもいろ〳〵にある」（九・33）と記され、様々な病いの存在が認められている。しかし、一般的に言われる病い、すなわち身上のさわりは、存在の根源の地平からみれば、私たちの心を誠真実の心へと入れ替えさせるために教示される親神の「てびき」である。「おふでさき」には、次のように記されている。

このよふにやまいとゆうてないほどに
みのうちさハりみなしやんせよ　　二　23
こればかりやまいなぞとハをもうなよ
月日ぢうよふしらしたいゆへ　　十一　26

病いに込められた親神の親心に目覚めて、心を入れ替える。そのことによって、心は次第に澄む。心が澄むにつれて、目の前にかかっている靄が晴れるように、親神の十全の守護の理、「かしもの・かりもの」の理が心底から納得できることになる。病いの根本の原因は、私たちの心遣いにあると諭される。私たち人間の身体は、親神からの「かりもの」であるが、「心一つが我がのもの」として、心の自由を許されている。

三　病いの根源的意味へ

この道の信仰では、身上のさわりをとおして、親神は私たちが心を入れ替え、心を磨きあげることができるように導いてくださる。「病いの元は心から」と教えられるように、親神の思いに沿わない自己中心的な心遣い、すなわち、心の「ほこり」を払うことによって、私たちは心を入れ替えるとき、病いの根を切っていただける。病いは親神が私たちの心得違いに対して反省を促され、心の成人への転機を与えるために与えられる「さハり」である。心が澄み切れば、身上もそのままに速やかにご守護くださると教えられる。

身上を病むのは、心の悩みや不足が身上に現われるからである。「身はかしもの、心一つ我がもの」であることを心にしっかりと治め、日々、陽気づくめに心勇んで通るようにと諭されている。「おさしづ」では、病いについて、次のように諭される。

身上〳〵悩む。身上悩むやない。心という理が悩む。身上悩ますは神でない。皆心で悩む。

明治 34 年 1 月 27 日

また「おさしづ」には、繰り返し「案じる事要らん」とか「案じてはならん」などの言葉でもって、親神にもたれて通るようにと諭される。親神が用に使おうとされる人は、身上にさわりをつけてでも、親神の「よふむき（用向き）」のために、この道の信仰に引き寄せられると教えられる。そこには親神の「ゑらいをもわく」がある。さらに、親神は私たちの誠真実の心を受け取って、いかなる病いであっても守護をくださる。たとえば、「救からんものを、なんでもと言うて、子供が、親のために運ぶ心、これ真実やがな。真実なら神が受け取る」（『逸話篇』16）という教祖の逸話にみられるように、親神は私たちの誠真実の心を受け取って、いかなる病いも救けられる。

おわりに

現代社会においても、病いはボルノウが言うように、「通常の生のプロセスの攪乱」であり、人間の生を脅かす出来事である。それは日常生活を支える生の基盤が、たとえ一時的であれ、崩れることを意味する。病いに込められた意味について、原典では、私たち人間の親が子どもを思う情に照らして諭されている。親神にとって「神の子供」である人間は「皆可愛い」ので、何とかして救けたいとの親心ばかりであり、「難儀さそう、不自由さそう」ということはない。

生の根源の地平からみれば、どのような病いも、私たち人間を救けたいとの親心にもとづく、根源からの救済への手引きである。私たちは病いという経験によって、生きることの根源的な意味をとらえなおし、本来的なあり方、すなわち「陽気ぐらし」の生き方へと、心を大きく転換することができるのである。